

龍谷大学史報

vol. 17



〈旧 龍谷蔵〉



〈現 龍谷蔵〉

目 次

図書館長としての思い出	小島 勝	2
龍谷大学での新しい人生との出会い	河嶋 壽一	4
『学林諸記』天保八年（一八三七）六月～同年七月	I～VI	
表紙解説・資料室だより		12

図書館長としての思い出



こじま まさる
小島 勝
龍谷大学名誉教授

私が図書館長を務めさせていただいたのは、2011（平成23）年度からの2年間であったが、率直に言って“長い2年間”であった。それまでの2年間、文学部の研究主任をしていたので、仕事の内容はおおよそ把握していたが、いざ務めてみると予期しないできごとや頭を悩ますことがら次々と出てきて、大げさに言えば気の休まる間のない2年間であった。

大学図書館というところは、社会人も含めてさまざまな人々が入りし、貴重書や大切な文物を保管しているだけに、その安全性の確保が日常的に昼夜を問わず求められている。ことに本学のように長い歴史をもち、きわめて貴重な文物を保存している図書館の責任は重い。また、大宮・深草・瀬田キャンパスの3館全体に目配りしなければならないので、その重圧は増すのである。

これらのことに加えて、私の図書館長の時期は、（1）深草図書館の建て替えと（2）ラーニング・コモンズの普及などが重なって、多くの労力を必要とした。

1973（昭和48）年に深草図書館が竣工されたが、それから40年を経て、現在は「和顔館」と呼んでいる「新1号館」の建設に連動して、新たな建て替えが計画されたのである。深草図書館の建築はどうあるべきか、いろいろと議論があったが、（1）図書館は大学のシンボルなので格調のある、総合情報棟のような建物がよいという意見と（2）IT時代の機能的な建物が望ましく、多様な学生の学修形態に応える多機能なものがよいとの意見に二分された。「深草」にあること、「新1号館」との関係、予算の関係などから（2）に落ち着くことになったが、これからの大学図書館のあり方の根本を問う議論であった。

そして、格調やシンボルは大宮図書館に求め、周囲を塀や壁で囲む「囲い込みのボックス型」から「見える化」をはかり、地域に開かれた、多様な学生のニーズに応える機能的な図書館の建築が大勢になっていった。井野谷文三次長とも「図書館がどこにあるかわからないようでは困る」と会議でも発言したが、「ガラス越しに中が見えるので問題ない」とのことであった。また、「新1号館」全体が「見える化」の設計のため、教室が廊下から透けて見えるので集中できないのではないかと、研究室も外から見えるので「うっかりあくびもできない」など反対意見も多数あったが、ブラインドを付けるということで折り合いがつけられた。

確かに、現在深草キャンパスを歩いても、一見して図書館と分かる建物はない。他の教室棟など同様の建物になっていて、一抹の寂しさを覚えることもある。しかしこれからの図書館のあり方として、「膨大な図書を所蔵している殿堂」であってよいとも言えない。やはり、利用者のニーズに温かく応える柔軟な構造をもった図書館が望ましく、外見にこだわるべきではないとも思える。以前に比べると現在は随分と図書館のスペースが拡張され、広々と伸びのびと学修できる環境になったことに安堵している。

また、「ラーニング・コモンズ」の構想が全国的に広がりを見せ、深草図書館でも試行されることになった。「ラーニング・コモンズ」とは、図書館内に談話のできる、共同学習を支援する空間を設置しようとする試みであるが、図書館のイメージを一変させる試みであった。これまで「図書館」といえば、「静粛」と楷書で書かれた貼紙のもと、談話は許されず黙って読書に集中することが当然視されていたが、近年の学生はゆるやかに友だちと談話もしながら、資料などをもとに意見交換し共同学習することを好む傾向があり、これに応えようとするものであった。

深草図書館の入り口左側にあった「軽読書コーナー」を模様替えしてパイロット的に試行することになったが、図書館事務部では私が図書館長になる以前から井上弓子課長を中心に検討されていたようである。しかし、実際に実施するとすると種々問題が出てきた。

(1) まず、談話をする学生と静かに読書をする学生との「共存」が可能かということが問題になった。学会の帰りにお茶の水女子大学図書館に寄って見学したが、うまくコーナーを仕切って共存していた。また、自宅近くの大阪大学図書館も見学したが、広い空間でのびのびと実施していた。京都大学や同志社大学、立命館大学にも見学に行ったが、部屋を区分したりしてそれなりに共存の実をあげていた。私もいろいろと思悩んだが、「軽読書コーナー」ではやや狭いと思うようになった。もう少し広ければ「共存」は可能なのである。結局「軽読書コーナー」は談話だけの「グループ学習エリア」になったが、勾玉型の机を自由に組み合わせたり白板を置くなどして、学生が生き生きと意見交換している光景を目の当たりにして嬉しく思ったものである。

また(2) 単なる「模様替え」でよいのかということも問題になった。図書館が学生の学修に関わるという意味で「図書委員会」に諮る必要があるのではないかということになった。しかし図書委員会に諮るとなるとそれなりの根拠が求められる。そこで私は全学部のシラバスを調べることにした。そうすると、授業形態として若い先生方を中心に問題解決型のグループ学習スタイルをとっているものが結構あったのである。これに意を強くして図書委員会に臨み、ラーニング・コモンズの実施が決められたことも印象的な思い出である。

しかし(3) この「コモンズ」は新1号館全体の構想に組み入れたいとのことで、図書館の予算としては認められなかったが、井野谷次長の努力で「模様替え」として実現した。これも図書委員会の議決が基礎にあったのではないかと思っている。こうしてパイロット的な試みであったが、それだけに“失敗は許されない”との堅い気持ちで取り組んだことが、現在の和顔館の「ステューデントコモンズ」・「グローバルコモンズ」・「ナレッジコモンズ」などの設置や「静かなエリア」と「会話OKエリア」の階による区分などにつながっていると思うと感慨を覚える。

このことと関連して、2012(平成24)年11月に「大学図書館における学習支援を考える」国際図書館協力シンポジウムが開催されたことも思い出に残る。このシンポジウムは、村上孝弘課員の企画で、先進的にラーニング・コモンズを実施していたアメリカのマサチューセッツ大学アマスト校とダートマス大学からゲストを迎え、広島修道大学図書館長や立命館大学図書館員とともに本学のアバンティ響都ホールで行なわれた。私は前日にこのホールを下見したが、近隣のお年寄りがカラオケ大会をやっておられたので、このシンポジウムのレセプションで「昨日は、このホールはお年寄りのお元気な声で鳴り響いておりました」とやると爆笑が起こったのも今はなつかしい。

これら以外に、①大宮学舎での特別展観「良如宗主—近世本願寺の礎^{いしずえ}を築いた宗主—」・「歌書と物語」、展観「近世日本の辺境地事情—主として北方地域を中心として—」の「ごあいさつ」文や②大宮図書館での『禿氏文庫目録』刊行の「序」文に苦労したこと、③「混一疆理歴代国都之図」や「安重根の遺墨」の保管に重責を感じたこと、④「私のお薦め本コンテスト—My Favorite Book—」で学生から思いがけず多くの応募があったこと、⑤閲覧室での「ふた付きの」ペットボトルの使用を認めたことなど数々の思い出が浮かんでくる。

どれも私にとって未知の経験であっただけに、特にご協力をいただいた図書館事務部の皆さん、アルバイトの皆さんに心よりのお礼を申し述べたい。大過なく図書館長を務められたことに深く感謝している。

伝統の重みと進取の心意気をあわせもつ本学図書館のますますの充実を願っている。

龍谷大学での

新しい人生との出会い



龍谷大学名誉教授 かわしま ひさかず
河嶋 壽一

私は、1995年4月に、ものづくり企業の研究所から理工学部機械システム工学科に赴任しました。その後21年間にわたり、教育・研究・大学運営等、当初は想定していなかった貴重な経験をさせていただいたことに、改めて深く感謝しています。1989年に開設された理工学部が軌道に乗り始めたところで、その後、今日の発展につながる各種の取り組みに関与できたことは誠に幸いでした。

赴任早々に感じたことは、瀬田の自然に恵まれた環境の下で、美しいキャンパスと、整備された教育環境でした。教育面では、企業での経験を活かして、機械の設計や製図、製品の加工等に関する授業を行いました。製図については、当初は手書き製図が主でしたが、すぐにコンピュータによる製図（CAD）が普及し、ノートパソコンでも実行できるようになりましたので、自動設計製図のテーマを設けて卒業研究に取り入れた上で、学生に実践力が身につくようにしました。

加工では、企業経験から、工作機械による実験授業を立ち上げ、工作機械を手動で操作することにより、加工の原理とともに、難しさと楽しさを実体験してもらえるようにしました。おかげで、学生からは、楽しかった・もっと経験したい等の感想を多くいただき、担当してよかったと思っています。ただし、実験は一步間違うと事故の危険性が高いため、学生全員に事故が生じないように細心の注意を払いましたが、幸いにも事故は一度も発生しないで退職でき、安堵しています。

加工の実験実習場所は、理工学部開設当初の制約等から、決して十分なものではありませんでした。その後、関係者のご意見等を集約して、2004年に、当時の形状測定・加工等に関する最先端設備を導入して学生の実践力の向上を図るために、現在の第2実験棟（通称、デジタルクリエーションホール）を、国の補助金を得て建設することができました。建設に当たっては、建設場所の提供や費用の補助等、関係者の皆様には多大のご指導・ご助力・ご協力等をいただきました。重ねてお礼申し上げます。今はやりの3Dプリンター等は、その時点ですでに導入していましたが、その後の技術進歩や他大学での設備増強等により、相対的に優位性は低下しています。時代の変化に対応した教育環境を充実する課題の一つとして、今後ともご配慮いただきたいと思います。

次は、学外実習に関してですが、理工学部では開設当初から必修科目として夏季に行われてきました。社会との接点が重要であるとの認識から、いち早くカリキュラムに取り入れられたことは、赴任前の企業人としては、高く評価していました。昨今では、インターンシップとして一般的ですが、当時としては先駆け的活動であり、今なお本学の強みとなっています。その後、選択科目とした学科もありますが、秋からの勉学、就職さらにはその後の実社会での活動等に、学外実習が有効であることに変わりはありません。また、教員が実習先を訪問して、社会の実態を知る機会があることは、意義のあることと思います。今後とも、継続されることを願っています。

次に、学生が外部に研究成果等を発表する機会についてです。理工学部長を拝命していた（2003年度～2004年度）ときに、学生と教員の共同参加による理工学会の参加費を学生に還元する機会として、学会への参加や発表等に対して、補助を積極的に行うこととしました。その活動結果は、理工学会の会誌（龍谷理工ジャーナル）に掲載され、その後推進された国際化対応とも相まって、国内のみならず海外での活発な活動報告が会誌に多数掲載され、学生へのよい刺激になっているといえます。

次に、社会連携について述べさせていただきます。赴任時にはすでに龍谷エクステンションセンター（REC）が開設されていました。RECの存在は企業在職中に知る機会がありましたが、当時としては画期的な取り組みであり、どのようにして本学が他大学に先駆けて社会との連携を始めたかについて、大きな関心と興味を持っていました。その後、初代センター長の小泉光惠名誉教授が亡くなられたまさにその年（2007年4月）に、RECセンター長を拝命し、設立された皆様方の想いを引き継ぎ発展させていくことを任務として、取り組んだことを思い出します。

次に、知的財産についてです。大学における知的財産に関しては、主に教員等の個人に属するとの旧来の考え方から、大学に所属する教員等による職務発明とする方向への転換が行われました。本学においても、知的財産の保護と利用を図るべく、国等の補助を受けながら体制の整備を独自に推進してきました。企業においては知的財産を担当する部署があり、私も企業に在職中は発明した特許を提出してきた経験から、本学の体制整備に最初から関与する機会を得て、体制が整備される前でも実質的に実務の一部を担当してきました。知的財産センターは当初計画よりも早く設置され、今日に至っています。知的財産活動は教員等の研究活動等が中心であり、センターはそれを支える役割を担っています。学内事情に詳しい知的財産アドバイザーに恵まれたおかげで、着実に独自の体制の充実が図られています。

最後に、当初は想定していなかった研究に関して述べさせていただきます。古典籍デジタルアーカイブ研究センターが発足するときに、学生の希望を取り入れて機械加工の研究を始めていたことから、仏像等の立体遺物の復元を担当する研究者として参画の機会を得ました。最初は小型の実験装置で行っていましたが、前述のデジタルクリエーションホールに導入された最新設備を用いることにより、3次元デジタル技術を活用した遺物の復元に本格的に取り組みました。大谷探検隊に係わる仏像、西本願寺御影堂の屋根の懸魚（火除け）の紋様、黄檗宗萬福寺（宇治市）の六葉、知恩院のかわらを始め、選択本願念仏集（法然）の版本とその版本、元三大師（天台宗）の版本、その他各種の遺物を対象としました。関係者の皆様からのご紹介や、古本屋、骨董市等を探し回って見つけたものです。それらの由来を調べることにより、仏教に関する知識と理解を深める機会を得ました。本学にお世話になったおかげと深く感謝しています。

また、退職の数年前には、寺の構造物等に取り付けられている銚金具を対象として、鑿を用いた彫金加工の機械化の研究に取り組みました。この取り組みを通して、現状の機械加工技術以上に必要とされる高度な技術を習得することにより、学生の今後の活躍に役立つと考えたからです。幸いにも、本研究を引き継いでいただけることとなりましたので、できる限り協力していきたいと思っています。

振り返れば、本学にお世話になって以来、学生の希望等を取り入れながら、卒業研究のテーマや、実験設備の導入等を図ってきた結果、本学への赴任当初には想定していなかった課題に取り組むことができました。また、大学運営については、副学長を拝命していた（2009年度～2010年度）ときを含めて、その時々の課題に真摯な対応を取ることを精一杯心掛けてきたつもりですが、少しでもお役に立てていれば嬉しく思います。

おかげさまで、2016年3月末で定年退職後、RECのフェローとして本学との関係も続いているので、先人のご努力により築き上げられてきた、すばらしいシステムと実績のさらなる向上発展に、微力ながら関わることができれば幸いです。永年にわたりお世話になり、誠に有難うございました。

留役所『学林諸記』二 天保八年六月〜同年七月

【頭注】

【翻刻】

六月廿三日

一学試験題伺左之通り。

正学

選択集

選択集 『史報』
三号頭注参照。

念仏為本

〇二行廃立

廃助傍三義

兼学

法華玄義

待絶開会

〇三諦勝劣

一生妙覚

一正

四帖疏

序題大旨

〇得忍所在

法界身三義

兼

天台止観

観境色心

〇初観三諦

真妄観境

一正

略文類

正列积三法

往還撰属

〇両典問答同異

略文類 略書。親鸞
を述べたもの。
三千・円頓止観の法
記。天台観門の一念

筑前 玄雄

豊前 南鳳

大坂 公龍

著。浄土文類聚鈔の

呼称。一卷。

法華玄義文句 法華

玄義と法華文句。玄

義は前述。文句は述

記者同じ、二〇卷。

両者あわせて一具と

なるもの。

帰三宝偈 善導著。

観経玄義分卷頭の偈

文。勸衆偈、又は十

四行偈ともいう。

大学 一卷。『論

語』『孟子』『中

庸』と並ぶ、儒教の

基礎的書物、四書の

一つ。

二門偈 『史報』十

六号頭注参照。

義林章 大乘法苑義

林章。唐の窺基著。

七卷。法相宗の教義

の中で、重要な問題

二九項目の研究を論

述したもの。

正信偈 『史報』十

六号頭注参照。

兼

法華玄義文句

法華教主

龍女権実

〇新成頭本

一正

帰三宝偈

〇所帰三宝

無上心義

回向文旨

兼

儒書経学詩文

大学八章段大意

一正

二門偈

〇入出往還同異

一心帰命

菩薩入出

兼

唯識論及述記義林章

〇因果能変

種子薰習

四分安立

一正

正信偈

両偈同異

〇法蔵信次

名号正業

兼

起信論義記

二乗有余無余
戒賢知光三時

肥前 全象

越前 玄存

勢州 梵龍

信論に対する注釈書。

一正 ○休相用三大

大無量寿経

出世本懐

○三輩隠顕

信行一念

兼

十不二門指要鈔

観心観境

三人得法

○両重能所

浄土論

願偈大意

略説一句

○観察大義

選撰集

略文類

○五念五正同異

三輩廃立

付属廃立

正信偈

五門存没

○専雜得失

往還因果

論註及選撰集

五念分斎

建章大旨

○起観生信

越中 格龍

了慶 不詳。

江州 隆恵^{*}

芸州 月瀛^{*}

豊后 雪峰^{*}

豊前 善讓

鷲山 不詳。

博仁 了祐。天保元年、行照に師事。弘化元年に美濃国長慶寺の住職となる。

岱観 不詳。Ⅲ頁下段の諦観のことか。

正信偈

偈前由序

○五願配不

証知生死

観経玄義分

○宗体差異

六字积義

別時意趣

論註

願生問答

法界身积

○大義門功德

観念法門

○観念大帰

五増上縁

当年我名

二門偈

○他利々他

不虛作四句

諸祖存没

観経三善義

七深信義

○二利真実

撰抑二門

論註及選撰集

濃州 了慶^{*}

同国 大信

越中 徳垂

同国 博仁^{*}

同国 鷲山^{*}

同 蔵遠

摂州 岱観^{*}

○宗体通局

三在義趣

実相為物

右伺論題内朱○印之分可然旨、御用僧方申出候ニ付、則相伺候上、○印之分人別ニ端書ニ致し奉書半切、論題伺之内右之通り被仰付旨申達、御用掛り江相渡ス。御用番大隅介。

六月廿八日

一御用掛り左司馬より申出ル。此度学林考試諮問者之義、別紙名前者へ申付候処、何れも断ニ而、内々承り候処、御殿方被仰付候義ニ候ハ、随分相勤可申候へ共、学林限ニ而申付候事故、相断候由ニ相聞候間、以来ハ御殿方被仰付候様致度旨、同人申出。断申出候名前左之通り。

越後恵琳

播州廓超

越中印持

筑前宝雲

伊勢梵龍

伊予克讓

右之内越中印持義ハ益前帰国差急候旨之断書、勸学曇龍手元迄申出候由。

六月廿九日

一学林所化中選挙之節、学試問者之義、以来者助教・得業共登り合之人數不残相勤候様、御用掛り方可申達様、左治馬江申達。右者是茂同様之次第ニ候得者、学林懸り役方之差凶故、兎角断申出候趣ニ付、此度改而前文之通り申達置候事。

七月十日

一学林学試相濟候ニ付、選挙願左之通。

一助教

越中瑞泉寺

格龍

一得業兼主儀

筑前正蓮寺

玄雄

一同断

豊前宗林寺

南鳳

一同断

大坂正覚寺

公龍

一同断

摂州信楽寺

諦観

一同断

越中弘誓寺

徳乘垂

一同断

豊前照雲寺

善讓

一得業

美濃快樂寺

大信

一同断

越前興源寺

玄存

一同断

越中報恩寺

蔵遠

一同断

肥前正行寺

全象

別段試問者方願

一兼主儀

勢州

梵龍

右御用懸り伺帳ニ認、左次馬方差出。

尚又試問者方試候所、年来練磨之体ニ相見候ニ付、得業被仰付被下度旨、学頭代曇龍奥印、願書十式通差添差出ス。右ニ付勘考之義、御用僧昭善寺江申達。

七月十一日

一銀三十枚

勸学

曇龍

晒布壹反

講師役料并教諭御会积与して被下。

但し右役料之義者、所化多人數之節者増被下候得共、当年者所化至而無人故、別段増被下候ニ者不及候旨。

一同拾枚

一晒一反ツ、

副講相勤候ニ付被下。

一晒一反ツ、

右教諭懸りニ付、例之通り被下。

右之通取計呉候様、御用懸左治馬方伺出。

右教諭懸りニ付、例之通り被下。

右之通取計呉候様、御用懸左治馬方伺出。

右教諭懸りニ付、例之通り被下。

右之通取計呉候様、御用懸左治馬方伺出。

右教諭懸りニ付、例之通り被下。

江州

慈航

頭注参照。

本柳寺 兵庫県姫路市網干区新在家。

来戊年監事被仰付之。以端書御用懸り方申達。右者播州本柳寺^{*}覚音江被仰付置候所、同国表御用蒙仰居候趣ニ而、御断申上候ニ付、代慈航江被仰付之。

七月十三日

一 晒一疋 講録差上候ニ付 筑前
同一反 教諭掛り御会搦 勸学 曇龍
右当夏御代講相勤、講録差上候ニ付被下之旨。且教諭懸りニ付別段被下之旨。於例席大隅介申達。
一同老反ツ、 美濃 行照
越中 令玄
播州 廓超

教諭懸り相勤候ニ付被下之。

一金貳百疋 ミノ 行照

副講相勤、講録差上候ニ付被下之。

右二点於御広間狭屋、大隅介申達。

一 銀三十拾枚 勸学 筑前 曇龍

講師役料被下之。

御用懸り方相渡。

一同拾枚 美濃 行照

副講師御役料被下之。

右同断。

七月十七日

一 歎願書 拙僧共

先達而試問被仰付、難有奉存上候。且又御殿試之義御願申上置候。就夫私共手許も時節柄悪敷候故、甚困窮仕り、尚国元親共病氣之由申参り候者も有之、又門徒死亡之者多く候而、指問之方も有之趣、追々申来り、内外共ニ大ニ難渋仕申候条、御憐察之上、何卒右御殿

試一日も早く被仰付可被為下候様取計之程、偏ニ奉願上候。以上。

七月十六日

上座惣代

岱觀

善讓

全象

藤満惣代

玄雄

徳垂

格龍

看護

御役所

一同 殿試伺左之通。

聞信一念

信願交際

機法一体

タスケタマヘノ名義

一念帰命

右伺之内論題

信願交際

右奉書半切ニ認、御用僧炤善寺へ申達ス。伺帳ニ朱丸を付、御用僧江相渡。

一同

大坂 僧珍^{*}

丹波 大鳴^{*}

学林蔵本拾一部、当四月廿七八日頃東中筋魚店上ル菱や宇助を相頼、質入致し、金子四両借用いたし候由、今月迄三元利合五両三部^(四)二朱ニ相成候由、学林限り保証へ預ケ置候旨、看護慧林申出候由、左司馬申出ル。

表向取調候様申達ス。知藏者豊前南鳳。

七月十七日

一

江州 隆恵

豊後 雪峰

美濃 了慶

越中 博仁

右四僧学試之節、学業未熟ニ有之、学階昇進之義者何

共難申上、選外之旨問者方申出候ニ付、其段御用僧江

申達、勘考之義申付候所、其後申出候ニ者、右四僧之

内三僧者老年之者も有之、且今年・明年之知事相勤候

人体、其上選外ニ而帰国致し候而者、門徒江対し、組合

法中江対候而も不面目之至ニ罷有候趣ニ付、殿試之義者

外一体ニ四僧之所も被仰付候様、格別之御憐愍被成遣

度趣、御用僧方申出候ニ付、無余義次第ニ相聞候ニ付、

相同候所、殿試之所格別之御憐計ニ而、外一体同様被

仰付候間、其段取計候様、御用僧・御用懸り江申達。

七月十九日

一殿相濟候ニ付、各論題筆録十一通并学試之節選外ニ相

成候四僧共、都合十六通り、御用僧炤善寺・興元寺方

差出。右ニ付別紙伺帳を以、左之通り伺出ル。

江州 隆恵

豊後 雪峰

美濃 了慶

越中 博仁

右四僧之義、学試之節者選外与相成、就中学解未熟之

場ニ相聞候所、此度殿試信願交際之論題、一同ニ銘々

筆録指上候ニ付、加談大行房江及示談候所、学解之所者

一統未熟ニ相聞、学林ニ於て選外ニ相試候段尤ニ被存

候。左候得者徳業昇階難被仰付筋ニ御座候所、右四僧

之内三僧者老僧ニ而、今年・来年之知事相勤候人も有

尸位素餐 才徳がな

いのにその位に居

り、いたずらに禄を

食むこと。

柔恩 不詳。柔遠の

ことか。

之、数年之間修学精勤仕、是迄学業不相廢、林中学階

之一等ニも相加り度心中、連年修学之志気者可致称美

義与奉存候。其上此度昇階之一等ニも難相加、空敷引

退候而者、帰国之上自分門徒・組内法中等江対し候而も

不外聞之至、失面目候事ニ可有之、尸位素餐之法中も

数多可有之所、右体老年迄修学之志有之族為蒙恥辱候

段、氣之毒之至与奉存候。且又四僧之内博仁義者、若

僧之由承り候得共、柔恩藹滿之曾孫ニ而、一宗学匠之

遣属故、学解秀才之人物ニ相見候間、同国并法類之族

方引立候心底方、押而徳業選試為相願候旨ニ相聞候

間、先代学功之子孫御取立之思召被為有度奉存候。依

之右四僧之族得業之任ニ不能、学解等熟之程者学試之

上選外ニ申出候得共、格別之思召を以、四僧江も徳業

昇階御免被成、此段勸学・司教方当人者勿論、試問之

族等江篤与被仰示候ハ、一同難有可致敬承奉存候。

一殿試之義ニ付、銘々之筆録披見、加談大行房江及問訊

示談候処、異義別心無之段者筆点ニ相頭候得共、自分

之解に会得之旨を以、御正意之趣相伺候所、熟未じゆ

く御座候。此義者撰外之四僧ニ不相限、多分之事ニ御座

候。此義者夫々不行届所、加談大行房并両寺方可申聞

候。併なから一同ニ修学精研之族ニ候得者、学試批判之

通り、助教老人、得業拾一人、并四僧江被仰付候様仕

度候。

同日

一勢州梵龍之義、勸学并試問者方願之通り、兼主義被仰

付候様仕度候。右兼主義之義、世出世共学林百事取計

之評議ニ相関り候役儀与承候。左候得者学業ニ付而者他

部相兼候人、世間ニ付而者秀才之人、其人柄見立、可伺

出義ニ付、此度兼主義之事者一統御沙汰無之、尤勢州

梵龍義者其人柄ニ依而、兼主義之願出候間、右老人江兼

主義被仰付候様仕度、此義御用懸り江も示談之上、奉

【補注】

①当年者所化至而無人故

当年（天保八年）は前年に起こった大規模な飢饉の影響で所化の生活が困窮している状況だった。このような状況の救済策として学林は四月に、在京中の所化に対して銭五百文を与えることを決め、『学林万檢』『三百五十年史』史料編一卷五八五―五八六頁）、本来七月十五日を期限とする懸席も十一月までは免除することを決めた（同五八六頁）。その後『学林万檢』十一月廿九日同日条で、未だに所化が上京してきているので懸席の期限を十二月まで延長すること決めており、（同五八九頁）本来の期限であった七月十五日までの所化の上京は、少なかったものと考えられる。

【解説】

本号掲載の『学林諸記』は次の通りである。

六月二十三日条で、学試論題の通達があった。玄雄のほか、総勢十八名の論題が決定されたのである。

六月二十八日条は、「学林考試」（覺試）の諮問者の人選についてのものがある。御用掛の大喜多左司馬によれば、恵琳ほか六名に試問を依頼したところ、いずれも拒否されたという。それは御殿からではなく、学林からの依頼であったためであるとして、今後は御殿から依頼すべきであると申し出ている。所化らにとって、御殿からの依頼には少なからぬ強制力が内在していたと考えられる。つづく六月二十九日条でも覺試運営の問題がとりあげられている。問者を依頼した際に、「学林懸り役方之差図」では拒否されてしまうことから、六月二十八日条の通り、御殿よりの依頼とすべきことが記されている。

七月十日条では、講師・副講・教諭懸りに、それぞれ役料が下附されている。曇龍の役料に関しては、所化が多数懸籍している場合は増額することになっているが、今年は「至而無人」であるために（補注①）、増額しないことが決定された。

また同日条には、来年の監事が慈航に決定したことを記している。もとは覺音を任命する予定であったが、別件のために代役として慈航が選ばれたという。

七月十三日条でも、曇龍が講録を提出したこと、行照らが教諭懸りに任命されたことを以て役料などが下附されている。

七月十七日条は、殿試に関する歎願書である。補注①や『史報』十五号補注・解説にも述べているように、天保七年（一八三六）以来の飢饉によって、所化らの生活は困窮していた。そのために国許を離れての長期滞京が困難であることから、殿試の日程を早めて実施してほしいと願ひ出たのであった。

また同日条には、学林の蔵本を質入れた事件についても記されている。僧珍・大鳴という所化らが、四月末頃に学林の蔵本十一部を、菱や宇助を頼り質入れし、金子四両を借りた。その返済分が五両三步二朱になっているという旨が学林に伝えられたようである。

続く七月十七日条では、恵隆ほか四名は、覺試の成績は未熟であったが、老年の者、或いは知事など学林の役職を務める者であり、国許へも示しがつかないという理由で、「格別之御憐愍」を以て殿試を受けさせるようにと留役所から御用僧・御用掛に通達したというものである。十九日条に、その経過が記されている。殿試は無事に済み、受験者の筆録と「選外」となっていた所化の筆録を差し出した。「選外」の者の筆録を曇龍に見せたところ、次のように述べた。学問としては未熟で、覺試で「選外」としたのはもともとなことである。

つまり、得業に昇階できないが、四名のうち三名は老僧であり、知事を勤めた者もあり、修学しようとする意志はある。しかし、このまま得業に昇階できないれば国許の門徒へも顔向けができない。それも気の毒である。そのうちの博仁は、柔恩の曾孫で、秀才のように見える。先代の学恩に免じて取り立てても良い、と曇龍は述べたのであった。つまり、得業に任ずるほどの学力を持ち合わせてはいないが、「格別之思召」をもつて昇階させる旨を試問者・当人らへ伝えたという。

また同日には、梵龍の兼主義任命についても記されている。兼主義とは「世出世共学林百事取計之評議ニ相関り候役儀」であるため、宗部・他部に秀で、人柄の良い者である必要がある。それ故、梵龍がその人柄を以て出願したので、御用懸と相談の上、伺が出されたのである。

以上のように、ほとんどが試問の記事であったが、「格別之思召」で昇階を許可されるケースがあったようである。登科試験制度が定められているものの、様々な要因が絡みあった、一種のなれ合いのような部分が存在していたことを窺わせる。

※本文の翻刻・解説は小林健太（本学大学院研究生）、頭注・補注については野口泰宏（本学大学院修士課程）が担当した。

資料室だより

資料保存作業として、以下の作業を継続しておこなっています。

- ・事務文書綴の修復、所蔵資料の調査・目録化
 - ・『立案裁決綴』のマイクロフィルム化と紙焼写真の製本、その他所蔵資料の製本
- ※15号より、『龍谷大学史報』はWeb版での発行となっています。

『龍谷大学三百五十年史』通史編 上巻・下巻、史料編 第一巻～第五巻



- 体裁：A5判／布クロス上製本／箱入
- 定価：各1冊5,000円（消費税別）
- ご注文は大学史資料室まで、FAXまたは書面にてお願いいたします。
- 送料：有料（送料の実費をご負担いただきます。）

【表紙解説】

本学大宮図書館にある龍谷蔵が本年度で設置から50年を迎えた。龍谷蔵は大宮図書館が所蔵する「禿氏文庫」「大谷探検隊将来資料」等から抜粋された約2万点の貴重書を管理するために造られた金庫式の書庫である。

同図書館の写字台文庫には、「龍谷蔵」設置に関する記録が残されている。龍谷蔵の設置は、当時の図書館長真鍋広濟氏によって発案され、昭和40年（1965）度から具体的に動き出した。当時は、貴重書の管理が行き届いておらず、図書館や研究室に配架されている一般書籍の中にも写字台文庫の書籍が混ざっているといった状況だった。龍谷蔵の設置はそういった貴重書の管理を目的としていたようである。龍谷蔵は、当時、図書館2階の積層書架横にあった雑誌整理室を改修して設置された。改修工事は昭和40年9月から始まり、12月末に竣工した。昭和41年2月3日『中外日報』の記事によると、その設置費用は約200万円（当時の大卒平均初任給23,263円）ほどであった。また龍谷蔵の庫上には、「龍谷蔵」の名を冠した扁額が掲げられることになったが、これは本願寺第23代勝如宗主に御染筆をいただき、それをもとに作られ、寄贈されたものである。そして昭和41年5月21日、宗祖親鸞聖人降誕会の際に龍谷蔵の竣工式が催された。式には、勝如宗主や学内関係者、報道関係者だけでなく府立総合資料館館長や国立博物館館長、他の仏教関係大学図書館長も招待されたようである。その後、龍谷蔵は平成15年（2003）から18年（2006）にかけて行われた図書館の改修工事の際に現在の図書館1階の場所に移設された。

龍谷蔵に所蔵されている貴重書には、日本、インド、中国、朝鮮など、国内外の仏教関係資料や洋書の稀観書などがあり、中には重要文化財指定されているものもある。本年度より本学では新たに文化遺産学専攻が設置され、文化遺産を保存、活用して後世に残していこうとする意識が高まっている。龍谷蔵は厳重な管理のもと、資料を後世に残していくことを目的としつつ、貴重な資料の数々を広く公開し、研究の一助となることも目的としている。龍谷蔵に所蔵されている貴重書の数々は、今後ますますその重要性が高まるであろう。

（野口泰宏）

2017年3月10日発行

編集・発行 龍谷大学大宮図書館（大学史資料室）

https://library.ryukoku.ac.jp/?page_id=274

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1

電話：075-343-3311（内線5114） FAX：075-343-3362